

## 児童養護施設の子どもたちに語った「こわい話」(2)

— 人形と少女の怪談を中心に —

西村 則 昭

「児童養護施設の子どもたちに語った『こわい話』(1)」(本巻所収)の続編である。ここでは特に人形と少女の怪談を取り上げ、子どもの感じる、物としての身体の不可思議性、「私」の存在の不可思議性について、ラカンの鏡像段階論なども参考にしながら述べた。

キーワード：人形、物としての身体、「私」の存在

### 10. 生きている人形

ぼくは一体の昭和初期の市松人形を所有している。手作りらしい紺の着物は、もうかなり色褪せている。手の汚れからは、この手を取って遊んでいた子どものことがしのばれる。なによりもその人形の内部から、じんわりと染み出し、ゆっくりと湧き出してくるような「笑み」が、ぼくにはとてもなつかしく、かわいらしく思われる。やわらかく微笑む「表情」が「今、ここ」でリアルに作られていく錯覚を、それは喚起してくれるのである。ぼくの市松人形は当時のこの種の人形の通例にしたがって、頭部には本物の人毛が植えられている。現代の一般的な感覚からすれば、それは無気味である。しかし当時のひとにはそれが自然で、また合理的で、適当な素材であったのである。現代の日本人形のように絹糸も頭髮に使用されたが、当時むしろそれは高価だった。市松人形といえば、「髪が伸びる」という怪奇現象が広く知られているが、本物の人毛が使用されているだけに、その話はリアリティをもつ。

「はなちゃんは、お熱がいっぱいでて、つらいよーって。でも、お医者さん、イヤーって行かなかった」。こんなふうに話をはじめると、少し離れたところにいた三歳の優奈(ゆうな)ちゃんが来て、ぼくに身を寄せてきた。優奈ちゃんは二、三日前まで、風邪で熱があった。優奈ちゃんは、自分がぼくの話の主人公になっているように思ったのであろうか。「そうしたら、はなちゃん、死んでしまった。お父さん、お母さんは、とても悲しんで、はなちゃんとそっくりの人形を作ってもらって、その頭に亡くなったはなちゃんの髪の毛を植えてね、その人形を大事に、大事にしていた。するとその髪の毛がだんだん伸びてきた。それでお母さんはきれいに切り揃えてやった。今度、その人形をもってこよう」

「約束ね」と、青花ちゃんがいった。

翌週、ぼくの市松人形をR学園に連れて行った。青花ちゃんをはじめ数名の子どもたちの前で、ぼくはおもむろに桐箱を開けながら、「怖いっていわないでね。そんなふうにいったら、この子、かわいそうだから」といった。瑞希ちゃんはだんだん怖くなってきた様子で、「見ないでおこ」と、両手で顔を蔽ってうずくまってしまった。ぼくは丁寧に箱からそれを取り出した。瑞希ちゃん以

外、子どもたちはぼくを取り巻き、神妙な顔で息をひそめてそれを見ていた。青花ちゃんが人形のいくぶん色素の抜けた一本の髪の毛を目敏く見つけて、それを指差し、「本当！ 人間の髪の毛だ！」といった。ぼくがだれにともなく「撫でてあげて」というと、一番年下の優奈ちゃんが手を出してきて、やさしくその人形の頭を撫でた。その人形をまた丁寧に桐箱に収めてから、ぼくはこんな話をした。

「はなちゃんは学校の帰り道、道に落ちている鞆をみつけた。黒い変てこな鞆。その鞆の中から声が出たように思って、耳を当ててみたけど、別に何も聞こえなかった。『変だな』って思ったけど、それは落し物だから、警察に届けることにした。『これ、むこうの道に落ちていました』って、警察の人にっていると、そこに白いお髭のおじいさんが来て、『おお、これはわしが落とした鞆じゃ。お嬢ちゃんが拾ってくれたのだね。どうもありがとう。そうだ、お礼にこれをあげよう』って。そういうと、おじいさんはその鞆を開けて、中からかわいらしい人形を取り出した。その人形の背中には紐がついていた。『その紐を引っ張ってごらん』って、おじいさんがいうので、はなちゃんがそれを引っ張ってみると、なんとその人形が『はなちゃん、こんにちほ』って、しゃべった。『わー、すごい！ どうしてあたしの名前知ってるの！』って、はなちゃんはびっくりした。そして『どうもありがとう！』って、その人形をもらった。帰り道、はなちゃんはまた人形の背中の紐を引っ張ってみた。すると『はなちゃん、この先の道に百円落ちていたよ』って。少し歩いていくと、本当に百円玉が落ちていた。それは警察に届けなくて、貰っておくことにした。また紐を引っ張ってみると、『はなちゃん、この先に蛇がいるよ』って。少し行くと、本当に蛇が道の真中をうねうねと動いていた。はなちゃんは回り道をすることにした。また紐を引っ張ると、『はなちゃん、あの子、こけるよ』って。前を見ると、小学生の子が歩いていて、本当にその子がこけた。はなちゃんはなんだか怖くなってきた。その人形を木の下に置いて、一目散に走って逃げた。すると人形が『あたし、はなちゃんの子どもになったから、はなちゃんといっしょにいる』って、空中をふわあり、ふわりと飛んで、追いかけてきた」。

「あのおじいちゃんが、うちよ（嘘）いったんだ」と、華鈴ちゃん。「人形は、逃げても逃げても追いかけてきて、ついにはなちゃんの背中にぴたっとくっついてしまった」。意地悪なぼくは華鈴ちゃんの背中に手をやった。「もう、やだ！」と、ちょっと顔をしかめてから、また好奇心でいっぱいの黒目がちの目でぼくを見詰めた。「はなちゃんは泣きながら家に帰ってきた。お母さんが『どうしたの』って。『背中見てよ』。お母さんがはなちゃんの背中をみたけど、なんともなかった」

華鈴ちゃんは人形の怪談が気に入ったようだった。よくぼくに「人形の話して」といってくるようになった。

## 11. 人形液

かつて「人形液」というものがあつた。「人形液」という名を聞くと、なにやら怪奇小説にでも登場しそうな秘薬を思わせるが、実は昭和初期の一時期、市松人形に使用されていた樹脂系の薬品である。人形の胡粉（貝を砕いた粉）の肌はしっとり艶やかだが、とても繊細で傷つきやすく、汚れがつくと落ちにくい。そこで昭和九年、人形の肌に皮膜を作り、保護する人形液が開発された。骨董屋でぼくは、下着のように胴に巻かれた和紙に、「人形液使用」という赤いシールの貼られた市松人形をみたことがある。ぼくはこの人形液にインスピレーションを得て、こん

な話を作った。

「はなちゃんはね、大人になりたいくない、子どものままでいたいって思っていた。そうしたら、魔法使いのおばあさんが来てね、『これは人形になれる薬、人形液だよ。これを飲んだら、人形になって、もう大きくなれないんだよ』って、人形液をくれた。はなちゃんは『やったー』って思った。でも、だんだん怖くなって、妹でたしかめてみることにした。妹に『これ飲んでごらん。おいしいよ』って。そうしたら、妹の動きがだんだんゆっくりになって、肌がこちこちになって、人形になってしまった」

「もう一回、飲んだら？」と、瑞希ちゃん。はなちゃんの妹がもとに戻る展開を、瑞希ちゃんは期待していることがわかったので、「もう一回飲んだら、もとに戻った。もうこんな怖いことはやめようって、その人形液の瓶は捨てた」。

その後、青花ちゃん（人形液の話のときいなかった）が、「大きくなりたくない、このままでいたい。結婚なんてしたくない」といったので、ぼくは「人形液というのがあってね、それを飲むと、人形になってしまう」といった。「えっ、そんなのあるの」と、青花ちゃんは期待してみせ、「もってきて！ 青花、人形になりたい。人形になったら、なんにもしなくていい。でも、ここにいたら蹴っ飛ばされたりするかな（R学園では玩具はしばしば乱暴に扱われ、すぐ紛失したり、破壊されてしまう）。あっ、そうだ、せんせいのお家に連れて行って！ 筆筒の上にでものせておいてくれたらいいから」。傍で聞いていた瑞希ちゃんは、青花ちゃんの意外な言葉に驚いて目をまるくしていた。青花ちゃんは「なれないってわかっているけど、なれるものなら、人形になりたい」と、静かにいった。

夏、ぼくはよく、ペパーミントのオイルを身体につけていた。そのさっぱり感が好きだった。その匂いを華鈴ちゃんは、「はなこちゃんのおい」といった。ぼくにだっこされた後の優奈ちゃんの体を珊瑚ちゃんがかんくん嗅いで、「優奈ちゃん、花子さんになっちゃうよ」と、心配そうにぼくにいったことがあった。

ぼくは悪戯心を起こして、ペパーミントのオイルの小さな空き瓶に水を入れ、そこに「にんぎょうえき」とマジックで書いたラベルを貼って、R学園にもっていったことがあった。ぼくはその瓶を華鈴ちゃんの目の前で弄んでいた。案の定華鈴ちゃんは興味を引かれ、ひったくるようにそれを取っていった。が、ラベルを読んでびっくりした様子。そのとき隼太君が横から手を出して、その瓶をひったくって、「これ、ぼくにちょうだい！」と、すぐさま自分のズボンのポケットの中に入れた。華鈴ちゃんは逃げて行って、保母さんにしがみついて怖がっていた。保母さんは華鈴ちゃんの訴えがよくわからなくて、「どうしたの？ わかるようにいって」と、困惑顔で笑っていた。

翌週、華鈴ちゃんはぼくに怒った。ぼくを指差して、保母さんが子どもを叱るときの口調で、「もう人形液なんて、ぜったい持ってきてはだめ！ いい！ わかった！」。いつにない激しい口調だった。「隼太君の手についちゃったんだよ」。叱責する華鈴ちゃんの目に、涙が溜まっているのを認めたぼくは、素直に謝った。横から隼太君が「うそつき！ 人形になんかならないやい」と、ぼくを蹴飛ばしてきた。

その後、あの瓶は柚葉ちゃんの手の中にあった。彼女はその瓶の水に木の枝を漬けて、その枝の先を水溜りのポウフラに突きつけていた。するとポウフラはたちまち動きを止め、のびてしまった。微量に残っていたアロマオイルが、殺虫効果を呈したのだった。柚葉ちゃんは次々とポウフラを殺害していった。彼女は魔法使いになりたいといっていたが、その枝を小さな悪魔を倒す魔

法の杖のように空想していたのかもしれない。

それからしばらくして、華鈴ちゃんが駆け寄ってきて、「華鈴ちゃん、人形の夢見たよ。教えてあげる」と、その夢をいくぶんたどたどしい口調ながら、一生懸命語ってくれた。ぼくも一生懸命聞いたが、そのとき周りが騒がしいのもあって、よくわからなかった。ただ、華鈴ちゃんが怪談口調で、「顔の半分が、しろーくなくて、もう片方もしろーくなくて……」と、両手を重ねて、自分の顔を撫でるようにしていたのは、印象的だった。ぼくの人形液の影響がそこには見られるように思った。

## 12. 少女の幽霊

R学園の建物はもう古く、廊下は子どもたちの涙（小さい子にとって、廊下はみんなと離れて泣く場所であった）と、おもらし（トイレが間に合わなくて）が染みこみ、そこを裸足の子どもたちがバタバタと頻りに往来することで、艶々と黒光りしていた。その廊下から暗い小川を連想したぼくは、「この廊下、川みたいに見えない？ ほら、あっちに魚が泳いでいるの見えるよ」。「どこどこ」と子どもたちはキョロキョロ見廻した。「あっ、ほんとう！ さっきちょっと見えたよ」と、青花ちゃんが目を輝かせて、ぼくの空想に呼応してくれた。

「はなちゃんのおじいさんの家は、大きな昔の家で、友達みんな遊びにおいでっていられたので、はなちゃんたちは遊びに行った。そこで泊りすることになった。晩御飯はご馳走がいっぱいだった。おじいさんは『この家には夜になると、不思議なことがおこるんだよ。どんな不思議なことか、今にわかるよ』って。みんなはどんなことが起こるのか、胸をドキドキさせていた。夜、寝る前、みんなは廊下で遊んでいた。廊下はピカピカで、きれいな川のような感じだった。ちらっ、ちらっ和小魚の影のようなものが見えた。だれかがタオルの端をもって廊下に垂らして、釣りのようなことをしてみた。するとグググって手応えがあって、引っ張ってみたら、タオルの先に本当に魚が喰いついていた」。

「こんなふうにして？」と、瑞希ちゃんは手にもっていたタオルを廊下に垂らした。「うん、そうするとね、こんなふうに魚が喰いついた！」と、ぼくの手が魚になって、瑞希ちゃんのタオルの端に喰いついて、くっくっとして引っ張ると、瑞希ちゃんは「おっ、釣れた！」と叫んで、引っ張り返した。

「それではなちゃんたちは、バケツに水を汲んできて、釣った魚を入れておいた。廊下を触ってみると、硬い木の手触りで、全然水ではない。不思議だね、廊下に魚がいるなんて。他の子も真似をして、タオルで釣りをした。みんなのタオルにも、どんどん魚が喰いついた。バケツの中は魚で一杯になった。そのときだれかが『あれっ、帽子が釣れたよ』といったので、そっちを見ると、白いかわいい麦藁帽子が釣れていた。『あっ、それ、あたしが昨日、川に落としてしまった帽子！』といった子がいた。『やっぱり、そうだ。だって、ここにあたしの名前が、ゆめって書いてあるもん』と、ゆめちゃんは帽子の裏側を指で示して、みんなに見せた。『ああ、よかった。あたし、この帽子、大好きだったのよ』。『ほんと、不思議だね』と、はなちゃんも目を丸くしていた。そのときです。『あっ、あれ何！』って叫んだ子がいて、みんな、その子の指差す方を見ると、暗い廊下の奥から、これくらいの大きさの、なんだか黒いボールのようなものがプカプカと、こっちに流れてきた（R学園の薄暗い廊下の奥のほうに、ぼくはなにか気配が感じられたかのように、顔を向けた。子どもたちもそっちを向いた）。子どもたちの前まで来て、それは止まっ

た。それは髪の毛の塊」。

「それ、かつらでしょ」と、青花ちゃん。「帽子の次はかつらか。はなちゃんは『かつらかな』って思って、手を伸ばすと、それがすうっと上に上がってきた。長い髪の下には俯いた顔があった。そして首が出てきて、胴体が出てきて、だらんと下げた腕が出てきた。ずぶ濡れの女の子。その子は俯いたまま、『わたしを捜して』って。それだけいうと、すうっと廊下に沈んでいった」

「川で溺れて死んだ子の幽霊ね」と、青花ちゃんはいうと、立ち上がって、自分の髪を顔の前にだらりと垂らして(彼女の髪は長かった)、俯き加減で「こんなふうに出てきたの?」と、幽霊の女の子を演じた。「うん、そうそう。はなちゃんはね、『きっと川で溺れて死んだ子の幽霊ね』って言って、『おじいさんにいってこなくっちゃ』といいに行った。おじいさんは『なんじゃと、そりゃ、大変じゃ。そういえば去年の夏、このあたりで行方不明になった女の子がいた。その子の霊にちがいない。それは川のどの辺か、わかるか?』って。『そうだ、ゆめちゃんが帽子落としたっていつか聞いた。ゆめちゃんに聞かないと』。『そうか、明日、捜してもらおうようにするから、今日はもう遅いから、子どもたちは寝なさい』って。はなちゃんたちは、またあの幽霊の子が出てきやしないかと、怖くてお布団にもぐっていた。『明日、きっと捜してもらいますから』って、はなちゃんはお祈りするように、心の中でくりかえし呼びかけていたが、いつのまにか眠ってしまった。次の日、おじいさんは他の大人の人達に知らせ、ゆめちゃんに教えてもらった場所を捜した。するとやはり女の子の死体が見つかった。それはもうほとんど骸骨になっていた」。

幽霊を演じるとき青花ちゃんは、お決まりどおりというか、髪の毛で顔を隠した。こうすることで青花ちゃんのイメージ、そしてふつうの女の子のイメージは消去される。誰でもない女の子、女の子の身体そのものが、ぼくの前に提示されることになった。青花ちゃんのような女の子にとって、日常の意識の底にいつも漠然と感じている、物としての自分こそが幽霊ではないか。青花ちゃんくらいの年齢(前思春期)になると、彼女のように感受性の強い子は、自分の体があることの不思議、自らの身体存在の神秘に、漠然とした感じであるとはいえ、打たれていると考えられる。そうした自我体験(「児童養護施設の子どもたちに語った『こわい話』(1)」本巻所収参照)としての身体感覚が、花子さんのような女の子の幽霊を生み出し、その実在を確信させることになるのではないか。青花ちゃんは幽霊の女の子を演じながら、物としての自分の神秘を味わっていたかもしれない。女兒が花さんに惹きつけられる心理は、女兒が人形に惹きつけられる心理と、一脈相通じるものがあるように思われる。人形もまた物としての自分を感じさせてくれるものであるから。この点で、花子さんとは人形のようなものである。

### 13. ミイラ

「こわい話して」と、青花ちゃんがいうので、

「はなちゃんがおばあさんの家に行ったときのこと。おばあさんの家は大きな古い家で、いくつも部屋があった。はなちゃんは家の中を探検することにした。大きな家だから、階段を上って、廊下を曲がって、また曲がって、階段を下りて、廊下を曲がってって、行った(夢の中でときおり体験するような、大きな建物の中をあちこち行くときのことを、ぼくは思い起こしていた)。暗い廊下の突きあたりに、薄暗い部屋があって、そこに大きなたんすが置いてあった。『何が入っているんだろう。おばけが出てきたらイヤだから、開けるのはよそう。もう怖くなってきたから、帰ろう』って、はなちゃんは戻ってきた」

「何が入っていたの?」と、瑞希ちゃん。「何が入っていたか知りたい?」。「うん、知りたい」と、青花ちゃん。「はなちゃんはやっぱり気になって、もう一回行ってみた。下から二段目の抽斗の右の取っ手と左の取っ手を握って、うーんと力をこめて引っ張ると(ぼくはその様を演じた)、ごとごとって音がして開いた。中には、女の子のミイラが入っていた」

「ミイラって?」と、瑞希ちゃん。「もう、いいから」と、青花ちゃんはいらだたしげに瑞希ちゃんの介入を打ち切って、「それから?」と、ぼくの話の続きを促したが、「ミイラというのはね、人が死んで、体が乾いてできる物なの。生きているときは、体ってこんなふうにはぼちゃぼちゃしてるけど、死んだら硬くなって、萎んでしわしわになって、黒くなってしまふの。それがミイラ」と、ぼくが説明すると、瑞希ちゃんは「ふうん」と納得してから、「その子はどうして死んじゃったの?」と訊いてきた。「かくれんぼしててね、『ここだったら、絶対見つからないぞ!』って、そのたんすの中に隠れたの。『だれかに閉めてもらわないといけないよね』と、合理的な青花ちゃん。「そうだね。その子は友達に、『はやく、はやく閉めて』って、閉めてもらった。でもね、その友達は開けるの忘れていて、そのまま帰ってしまったの。それでその子はそのたんすの中で死んでしまって、ミイラになってしまった。これがたんすの中の花子さんです」

「はなちゃんはお母さんに言いに行ったの」と、瑞希ちゃん。「うん、『お母さん! お母さん! 大変! 大変! ミイラがいたの! 早く! 早く!』って。はなちゃんはお母さんといっしょにそこに行ってみた。お母さんはその女の子のミイラを見ると、『あっ、これは花子ちゃんだ。お母さんのお友達で、昔、いっしょに遊んでいて、いなくなってしまうの。みんな探したけど見つからなかった。こんなところにいたのね。見つけてあげられなくてごめんね』って、お母さんはぼろぼろ涙をこぼしていた。はなちゃんも悲しくなって、お母さんといっしょに泣いていた」

柚葉ちゃんはこの話が気に入ったようで、その後何度かリクエストしてきた。他の子たちも前にして、ぼくは「みんな、花子さんって知っているよね。そう、トイレの花子さん。そのトイレの花子さんとは別のお話で、たんすの中の花子さんというのがあってね。そのお話をしよう」といった前置きをして物語ったものだ。

青花ちゃんはミイラが好きになって、よくぼくに「ミイラの話して」とせがむようになった。ぼくは昔の日本で人々の願いをかなえるため土の中のうつろで鈴を振り鳴らし、生きながらミイラとなったミイラ伝の話も行った。

R学園の費用で、子ども一人一人に好きなものを購入してもらえることになったとき、本好きの青花ちゃんは、「ミイラの本」を注文して買ってもらうことにした。「青花、ミイラの本を買ってもらうの」と、彼女は嬉しそうに何度もぼくにいていた、「本が来たら、せんせいにも見せてあげるね」。それは児童向けにマンガを用いて解説した、真面目な学習図書だった。エジプトやシルクロードなどの有名なミイラの話が載っていた。青花ちゃんはその本をぼくに貸してくれた。ぼくはミイラに惹かれる青花ちゃんの気持ちに思いをめぐらしながら、その本を楽しく読ませてもらった。

青花ちゃんはどうしてミイラに関心をもつようになったのか。たしかにミイラの怪異な姿や、その呪いといったものに、怖いもの見たさが掻き立てられるといえる。しかしその深層心理を考えてみるならば、ここにも先に述べたような、前思春期のとくに女兒における心理が見えてくるように思われる。

「生」とは何だろうか。「死」とは何だろうか。生物学的ではなく、心理学的に問うている。死とは、もう動いたり、しゃべったり、笑ったりしなくなった、身体の状態である。身体から

その人の表情（顔だけではなく、身体全体の表情）、すなわち、お馴染みのイメージが永遠に消え去ってしまう事態。どんなに求めても、かつてのイメージはその身体からはもう出てこない。われわれにとってイメージこそが人間の生命であり、存在である。だから亡くなった人のことを「心の中で生きている」という言い方をする。生きている人間であるかぎり、こんこんと湧きつづける泉のように、その人のイメージが生成され続けている。人間関係は通常、イメージを纏った身体を用いて営まれる。つまり、イメージを纏った身体を相手に提示しつつ、イメージを纏った身体を通して相手を認知するのである。こうして物としての身体は隠される。死はその隠された身体そのものをあらわにする。しかし通常、死体（＝物としての身体）は、長くこの現実世界に留め置かれることはない。それは焼却される。それは衛生上の理由からでもあるが、その心理的な理由としては、物としての身体を怖れるからである。

では、ミイラであるとはどういうことだろうか。ミイラは、生前のその人の表情（＝イメージ）がほとんど消え去って、物としての身体をあらわにしているが、枯れ細り萎びて変色しつつ、なおこの世界に留まりつづけるその身体には、かすかにではあるが、そのひと自身の意識が残存しているのではないかという幻想を掻き立てるものがある。ミイラは骸骨とは違い、まだかろうじて「水気」（＝生命感）を残しているから、そこにわずかの意識が残留していてもおかしくはないと思わせる。かつての生活の中で自他共に認知していたその人のイメージを脱ぎ捨てた意識、その意味で誰でもなくなった意識、「永遠の謎」としての自分の存在が、そこにはあるように思われる。小さい子どもにとって、本物のミイラとそれとそっくりの人形とは、怖さの質は変わらない。しかし青花ちゃんくらいの年齢になると、本物のミイラに向き合って、そこにかつてわれわれとかわらない人間の心があったことを思うことができる。そこにはかつてそのひと独自のイメージが日々生成されていたが、それを容赦なく打ち壊してしまった死の威力を思うことができる。単に怖いだけではなく、そこにしんみりと自分の身体と同質のものを感じ、自分をミイラの立場においてミイラであるとはどういうことか思いをめぐらせることができる。そうして日常生活の底にいつも横たわっている物としての自分を感じ、自らの存在の謎を味わうことができる。この点、ミイラは人形よりも人形的といえるかもしれない。

#### 14. バラバラになった体

ある秋の午後、体育館の床の上に、青花ちゃんは敷物を広げて、「はい、せんせい、ここに座って」といった。三、四人の子どもたちもそこに腰を下ろし、ピクニックのようだった。開け放たれたドアから、金木犀の香りを乗せた心地よい微風。「はい、こわい話して」と、青花ちゃんはぼくにいって、手にもっていた呼び鈴を示して、「これ鳴らしたらはじめてね」。それから青花ちゃんは子どもたちの方を向いて、「しゃべる人がいたら、これ鳴らすからね」と、小学校の先生のように言った。こんな話をぼくはした。

「はなちゃんは、学校にお弁当箱を忘れてきてしまった。お母さんは『はな、また忘れてきたの』って怒って、『もう今日は許しませんからね。これから学校へ行って取ってきなさい』って。それではなちゃんはひとりで泣きそうになりながら学校へ行った。もう夕方。誰もいなくなった学校へ、こわごわ入っていった。薄暗い教室に入って、はなちゃんは自分の机を見てみたけど、お弁当箱を入れた手提げ袋はなかった。あれっ、どうしたのかなって思っていると、『はい、これ』って、後ろで声がした。振り返ってみると、花子さんがいた。花子さんは、はなちゃんのお弁当箱

を持っていた。はなちゃんはびっくりして、そのお弁当箱をガッとひったくって逃げた。走って逃げて、もういないだろうって思って、立ち止まって後ろみたら....., いなかった。ああ、よかった。ふと手にもっているお弁当箱の中で、なにかゴロゴロしているのに気がついた。今日は何もおかず残してないのになあ。そう思って開けてみたら....., 何が入っていたと思う？」

「指」と、青花ちゃん。「そう、指が入っていた。はなちゃんがお弁当箱をひったくったとき、花子さんの指が取れて、その中に入ったの。」「何本入っていたの?」と、隼太くん。「一本だけ。すると、花子さんがやってきて、『あたしの指、返してー』って。はなちゃんはまた逃げた」

「早く投げて返してやったらいいのに」と、青花ちゃん。「そうだね。はなちゃんは、その指をつかむのイヤだったけど、つかんで、花子さんのほうへ投げた。そうしたら花子さんは消えてしまった」

妖怪の身体部位は、人形のように、取り外したり、取り付けたりがたやすくできる。腕を斬られ、それを取り返しに来た河童の話もある。われわれは幼少期、自分も含め人間の手足は取り外したり、取り付けたりができるように感じていたのではないか。ここで想起されるのは、ラカンの「鏡像段階」の考え方である。それは六ヶ月から十八ヶ月の時期に相当し、この時期、子どもは鏡に映った自らの姿を見て、大いなる喜びをもってそれと同一化する。そうすることでバラバラな身体をひとつにまとめあげ、自分というものを構成するという説である。赤ちゃんを鏡の前に連れて行ったとき、なぜかキャッキョと喜ぶ様子を見て、面白く思っていた方もおられるだろう。このとき言葉が重要な役割を果たす。「ほら、あそこに××ちゃん、いるよ」という言葉かけが、子どもの喜びを煽り、鏡像段階を促進することになる。鏡像段階において自らの身体像が完成した後も、それが未完成だったより早期の身体感覚は残っている。それがなにかの拍子に突然よみがえるとき、無気味な感じが起こる。そしてラカンのいう「寸断された身体の幻想」が生まれる。青花ちゃんがお弁当箱の中の怖いものは何かを考えて思いついた「指」は、そうした幻想に属するといえる。ぼくはこんな話をした。

「昔、インド大魔術というのが、公園に来てね、どんなことやったかという、インド人の魔術師がロープをパッと放り投げると、それがピンと竿のように、こうまっすぐ空に向かって伸びていった。小さな子どもが出てきてね、そのロープをするするするって昇っていくの。どこまでもどこまでも。もう見えなくなったと思ったとき、ポトポトって何か落ちてきた。それはさっき昇っていった子どもの頭とか手とか足とか胴体とか。体がバラバラになって落ちてきた。みんなびっくりしていると、魔術師は『みなさん、怖がらなくてもいいですよ。これは本物ではありませんからね』といった。よく見ると、それらは人形の頭や手足や胴体だった。なあんだ、人形かあって、みんな安心した。魔術師は、そのバラバラになった人形の体を集めると、大きな箱の中に容れた。『さあ、みなさん、お立会い、この箱の中から何が出てくるか、ご照覧あれ』といって、箱を開けると、中からさっき空に昇っていった子どもがでてきた」

これは昔から有名な話であり、まことしやかに語られることもあったという。ぼくも子どもの頃、この魔術のことをどこかで聞いて、なにか不思議な雰囲気を感じた。空へと昇っていく子どもは、やがて点となって消えてしまい、観客の目の焦点は合わなくなる。こうして観客は催眠術にかかったような夢幻的な気分になる。どこまでも空に伸びるロープは、あたかも透明な湖水に垂直にたらしめたロープのように見える。「上方」がいつのまにか「下方」に感じられる。そのとき空の彼方は、自分の心の奥底となる。その遠い遠い心の奥から、鏡像段階における「私」の構成以前のバラバラの身体がやってくるのである。



ふと向こうのほうを見ると、優奈ちゃんと西太君が新聞の広告を硬く丸めた剣で、「やあやあ」と声をあげ、「戦い」をしていた。

## 15. 人形になった女の子

幼い子は身体像が確立したといっても、またバラバラに崩壊してしまいそうな不安をかかえている。こわばって、ぎくしゃくした、そんな物としての自分が不快で、不機嫌になることもある。だから、だっこされて、相手の身体が作ってくれる柔らかく心地よい枠の中に、自分の身体をすっぽり納める必要がある。その枠の中で連結がゆるくなっていた身体は、ゆっくりとつながり、整っていく。そしてひとつのまとまった身体像ができあがる。こうして心身のこわばりはときほぐされ、自分の存在は心地よいものと感じられるようになるのである。

あるとき、四歳の優奈ちゃんは、お昼寝の時間になって保育さんが呼んでいたけど、なにか不機嫌になっていて、ひとりで離れていって、ブランコに乗っていた。ぼくはそこにいて、「お昼寝の時間だよ」といったが、優奈ちゃんのかたくなな感じで動かなかった。それで「じゃあ、だっこして行くかな」というと、優奈ちゃんはパツとぼくに吸い付くように抱きついてきた。甘いビスケットの匂いがした。そうして幼児さんの部屋へぼくは向かったのであるが、途中で小学校一年生の男の子が、「甘えている！ 降りろ！」とあって、無理やり優奈ちゃんの足を引っ張って、引き摺り下ろした。ぼくは彼の気持ちもわからないではなかったのに、彼に逆らうことはしないで、泣きそうな優奈ちゃんの手をつないで行くことにした。廊下の角を曲がって、その男の子からこちらが見えなくなったところで、ぼくが「だっこして行くかな」というと、優奈ちゃんは「おんぶう」といった。それでおんぶして行くことにした。

子どもの「だっこ」の欲望は、崩壊しそうな自らの身体をすっぽり容れてくれる枠への欲望である。そのやさしい枠の中で子どもは身体像を整えながら甘えん坊の自分を享受するのである。身体に不安感が漲っているには、安心して眠ることはできない。きっと優奈ちゃんはそんな状態だったのだろう。

あるとき優奈ちゃんにはこにこしてぼくのところに寄って来て、両手を上げて「抱っこして」という意思表示をして、「あまえんぼ」といった。ぼくもこにこして優奈ちゃんを抱き上げて、「この子は本当に甘えんぼなんだからなあ」とあって、彼女のお尻の辺りをポンポンと叩いた。

小さな子どもがだっこをせがむとき、彼らは突き上げてくる欲望のまま「だっこ、だっこ」と発語しているのである。このとき子どもはまだ主体ではない。そして子どもは親（他者）にだっこされる。親は「この子は本当に甘えんぼなんだからね」と、やさしくニコニコする。このとき子どもは、このひと（他者）は「だっこ」をしたいと思っていると思う。そして「この子」といわれた自分というものに気づき、「だっこ」を自分自身の欲望として受けとる。こうして自分自身の欲望を抱えることによって、主体となるのである。こうして主体となった子どもは、たとえば、こんなふうになるだろう。「ちゆかれた（疲れた）。だっこ」とか、「なかちゆいた（お腹空いた）。あめ、かべたい（食べたい）」とか。こうした場合、すでに成立した主体があって、主体の状態がこれこれ（疲労とか空腹）であって、主体はその状態を理由として掲げて、他者に向き合い、他者に何かを要求しているわけである。

ぼくが優奈ちゃんをだっこしすぎるといっているので、柚葉ちゃんたちが怒ったことがある。小学生の子どもたち数人に、優奈ちゃんとぼくは取り囲まれてしまった。泣き出しそうな優奈ちゃんに、

小学校六年生の男の子が厳しい保母さんのような口調で、「だっこばかりしてもらってはダメなの！ わかった！」と、叱責していた。ぼくがあえておだやかな調子で、「小さい子は甘えてもいいんじゃないかな」と抗弁すると、柚葉ちゃんが「せんせいは小さい子、小さい子っていうけどね、柚葉たちも子どもなんだからね。子どもって、小さいってことなんだからね」と、ぴしゃりといった。そのときは優奈ちゃんもぼくも、だっこを断念せざるをえなかった。そんなことがあったので、ぼくはこんな話を作った。

「はなちゃんが優奈ちゃんぐらいのときにね、お母さんが『甘えんぼはよくありませんから、今日から、だっこはダメですからね』って言って、それからはもう、はなちゃんはお母さんにも誰にもだっこしてもらえなくなった。だっこしてほしいけど、いつも我慢していた。そうしたらだんだんはなちゃんの動きがおかしくなってきた。ぎくしゃくして、なにか人形が動いているよう。顔も手も足も、コチコチになってきた。そしてとうとうバタンって倒れると、頭と手と足が取れてしまった。もうすっかり人形になっていた。お母さんはびっくりして、お医者さんに行った。お医者さんは『だっこされていないから、こんなふうになってしまったんですよ』って。はなちゃんのバラバラになった体は、お医者さんに直してもらって、家に帰ってきた。お母さんはそれからはだっこするようにした。そうすると、だんだんやわらかくなってきて、しゃべるようになってきて、最初はぎくしゃくした動きだったけど、やがてもどのはなちゃんに戻った」

## 16. 一つ目や一本足

ある日、廊下で瑞希ちゃんと華鈴ちゃんは、それぞれ、あぐらをかいたぼくの右と左の膝の上に座っていた。華鈴ちゃんが「こわい話してあげよう」と、おもむろに語りはじめた。怖い話のねっとりした口調で、「一つ目」とか「骨」とか、いかにも怖い言葉が出てくるのだが、華鈴ちゃんの話はたどたどしく、話の筋がよく見えてこなかった。瑞希ちゃんが「もういい」というふうに華鈴ちゃんの話の打ち切って、「せんせいがして」といった、「一つ目のうさぎの話して」。中庭で優奈ちゃんがひとりで遊んでいるのが見えたので、

「優奈ちゃんがお外でひとりで遊んでいたら、ぴよんぴよんって、一つ目のうさぎがやってきた。そして『優奈ちゃんのおめめ、一つちょうだい』って。そのうさぎは、優奈ちゃんのおめめを一つ盗っていった。優奈ちゃんがうつむいて泣いているので、園長先生がそこにいったら、白いうさぎが園長先生のほうを見ていて、一つは赤いうさぎの目だったけど、もう一つは優奈ちゃん目だった。園長先生は『優奈ちゃん目を返せ！』っていったけど、うさぎはぴよんぴよんって行ってしまった。園長先生は追いかけたけど、うさぎはあっという間に逃げってしまった」

「うさぎは走るの速いからなあ」と、瑞希ちゃん。「どうしたらいいかな」と、ぼくが訊くと、瑞希ちゃんは「ドラえもんのどこでもドア使ったら」。「そうだね。園長先生は『瑞希ちゃん、それはいい考えだ』って。そして園長先生は車に乗って、のび太君の家に行った」。ここでぼくがドラえもんの声真似をすると、瑞希ちゃんは喜んで、「もう一回行って」と、三回ぼくにそれを繰り返させたが、「はやく次行って」と、華鈴ちゃんが話の続きをせかしたので、「園長先生はドラえもんに、どこでもドア出してもらって、『優奈ちゃん目を盗っていったうさぎのところに出ろ！』って、どこでもドアを開けた。するとあのうさぎがいた。でもすぐぴよんぴよんって逃げちゃった」

「ドアを開ける音が聞こえたからだよ。そおっと開けないといけないのよ」と、瑞希ちゃん。「そ

うだね。『瑞希ちゃん、それはいいことってくれた』って、園長先生は今度はそおっとドアを開けた。あのうさぎは後ろを向いていた。園長先生はパッと捕まえた。そして優奈ちゃんの間を取り返した。優奈ちゃんの間が戻ってよかったね。はい、これでおしまい」

「次、かさお化けの話して」と、瑞希ちゃんがいうので、

「はなちゃんがね、小学校へ出かけるとき、雨が降っていた。玄関には、はなちゃんのカサがなかった。それで、『お母さん、はなのカサがなくなっているよ』って、大きな声でいった。すると階段の上から、『いま、行きまーす』って怖い声がして、ひょこんひょこんって、かさお化けが下りてきた。大きな一つ目で、大きな舌をべろべろって出している。はなちゃんはびっくりして、気絶してしまった」

「キゼツって？」と瑞希ちゃんが訊くと、そばにいた青花ちゃんが「怖くてどうしようもないとき、寝たようになってしまうことよ」と、代わりに説明してくれた。

それから中庭で、かさお化けごっこをすることになった。子どもが大きなスコップの刃の上に両足を載せて立ち、両手は柄を握っていて、ぼくがその子の脇の下から手を差し込み、その子の身体を抱えて、びよこんびよこんと動かすのである。「一本足、一本足、かさお化け、かさお化け」と、ぼくは歌うようにいった。子どもの体重でスコップの刃の先がざっくざっくと土に刺さるのが心地よかった。順番に幼稚園から小学校低学年までの子どもをそうやってかさお化けにしていたが、前屈みで力を入れなければならないので、ぼくはへたばってしまった。そこに柚葉ちゃんが来た。いつも「しっかり者のお姉ちゃん」の彼女が、珍しく甘えた声で「柚葉も一本足やって」といった。ぼくは残った力で彼女もかさお化けにした。彼女は数歩びよこんびよこんと跳んだだけで満足したのか、「もういい」といって、どこかに行ってしまった。

別の日、「かりんちゃん、こわいお話、かんがえたの」と、華鈴ちゃんはぼくにいって、「いっぼん足のネコがいてね」と語りはじめた。しかしまた話はよく見えてこなかった。ぼくは、江戸の花街で三味線に合わせてコミカルに踊られた「猫じゃ、猫じゃ」を思い出したので、「そのネコは踊りが上手だったんじゃない。猫じゃ、猫じゃって」。「そう。ねこちゃん、ねこちゃんって。せんせいがお話して」

「一本足のネコがいてね、踊りがとても上手でした。猫じゃ、猫じゃって、ぴよんぴよん跳んで踊るの。コテってコケてしまって、また起き上がって、猫じゃ、猫じゃって。そんなふうに踊っていたら、いろんな動物が集まってきて、いっしょに、猫じゃ、猫じゃの踊りを踊りました。みんな、コテってコケて、また起き上がって、猫じゃ、猫じゃって」

華鈴ちゃんは「ねこちゃん、ねこちゃん」と、水平にした両手を打ち合わせて、踊りの拍子をとった（これは華鈴ちゃんの考案）。

「いっぼん足のネコの話、かりんちゃん、考えたの」と、華鈴ちゃんはそれからみんなに自慢して、「せんせい、いっぼん足のネコやって」と、ぼくを踊らせて、自分は手で拍子をとった。たまたまそばを通りがかった中学生の女の子にも、「見て見て、いっぼん足のネコ、かわいいでしょ。かりんちゃんが考えたの」。その中学生の子（気性が激しく、悩み多い子だったが）に、やさしい口調で、「うん、かわいいね」といってもらえて、華鈴ちゃんは得意げだった。

ある日、瑞希ちゃんは近くにころがっていたゴムのボールの上に腰掛けていた。そうして彼女は前屈みになって、頭を上下にぶらんぶらんと振っていた。その様子を見て、ぼくはこんな話を思いついた。

「はなちゃんがね、こうやって（先ほどの瑞希ちゃんの様子を真似て）首を振っていたら、こ

とんって、頭が取れちゃった。わあ、頭が落ちちゃったよう、大変だあって、急いで拾って、取り付けた。ああ、よかった、くっついた……って思っていたら、わあ、反対側につけちゃったよう。背中の方に顔があった。そう気づいたときには、もう取れなくなっていた。それから服を後と前反対に着て、後ろ向きにこうやった歩くようにした」と、ぼくは立ち上がって、後ろ向きに歩いて、「ずっとそうして誤魔化していた」

「ズボンは？」と、瑞希ちゃん。「ズボンも反対に履くことにした」。すると柚葉ちゃんが真面目な顔で、「はなちゃんて、女の子でしょ。女の子だったら、こうなってくるんじゃない」と、両手で自分の胸の前に膨らみを作った。「あっ、そうか。それでは困るからって、はなちゃんはお医者さんに行って、首を切って、ちゃんとしてもらった」

この柚葉ちゃんの言動は、これから自分が第二次性徴期にはいって行くことを、彼女なりにちゃんと覚悟していることを窺わせ、印象的だった。彼女は両手の中に、もう少ししたら彼女の身体にも訪れる膨らんだ胸を予感していたにちがいない。女兒にとって、第二次性徴期を迎えることは、物としての自分の感覚を高めるだろう。思春期の子は、違和感と羞恥心をおぼえる身体部位を新たな自らの身体像へと統合していかなければならない。

## 17. シャム双生児

青花ちゃんが柚葉ちゃんに向かって、「夜中のちょうど十二時に鏡を見ると、そこには死ぬときの自分の顔が映っているんだって」と、どこかで聞いてきたらしい話をした。それを受けて、柚葉ちゃんは、「この前、夜中に目が覚めたとき、机の上の鏡が柚葉のほうを見ていて、こわかった」といった。

この「鏡が見ている」という言い方は、鏡に命があるように、鏡を「見る主体」にしている、ぼくには面白く思われた。その言い方は、柚葉ちゃんの自然な感覚がそのまま言葉になったものであり、それだけに面白かった。そこでぼくは柚葉ちゃんの言葉につなげて、こんな話をした。

「はなちゃんがね、夜中に目が覚めたとき、ふと見ると、鏡が自分のほうを見ていた。はなちゃんは怖かったけど、勇気を出して起きて、その鏡にハンカチを被せておいたの。これで安心して眠れるって、お布団にはいっていたら、なにか小さな声が聞こえてきた。『見えないよう。見えないよう』(ささやくような声で)って。そしてパタンって音がした。はなちゃんは怖くて、お布団にもぐっていた。そしていつのまにか眠ってしまった。朝起きて、机の上を見てみたら、鏡が倒れていた。それで夜中のことを思い出して、怖くなって、お母さんにいいに行った。お母さんは、『その鏡には霊が憑いているのかもしれないから、お寺に行って供養してもらいましょ』とあって、いっしょにお寺に行って、その鏡を預けてきた。はなちゃんは新しい鏡を買ってもらった。はなちゃんはたまに、その鏡も自分のほうを見ていないんじゃないかって思うときがあった」

何かを見ているひとの瞳には、その見ているものが映っている。鏡もその瞳のようなものである。そこに映っているものを鏡自身が「見ている」と、子ども心に感じられるのも不思議ではない。生物学的=常識的な「生命」の概念があやふやな幼い時期、人形が生きているように感じられるように、鏡もまた生きているように感じられる。その頃の感覚が突然よみがえるとき、鏡が生きているように思われ、無気味に感じられる。

生きている鏡の恐怖と類縁の恐怖に、鏡に映った自分の姿が、別の意思をもって動き出すというものがある。鏡を見ていたら、こちらの自分は笑っていないのに、鏡の中の自分がニッと笑っ

たとか。ラカンの鏡像段階を思い起こしてみよう。六ヶ月から十八ヶ月の間の時期、鏡像との同一化によって「私」は構成される。しかしうまくいかに、鏡に映った「それ」になることができたからよかったものの、もしかしたらそれは不成功に終わっていたかもしれない。そんな不安がよぎることがある。人形が別個の意思をもって動くと思われ、鏡の中にいる人の形をした「それ」も、別個の意思をもって存在することが信じられる。「それ」の姿形を奪い取ってしまわなければ、この自分はないのだとしたら……。「鏡」の話に続いて、ぼくはこんな話をした。

「はなちゃんはね、おぎゃあおぎゃあって産まれてきたとき、妹のゆめちゃんと体がくっついてたの。お母さんはびっくりしたけど、ふたりともとてもかわいらしい顔（もちろんまったく同じ顔）の赤ちゃんだったの、育てることにした」

「こんな感じ？」と、青花ちゃんは柚葉ちゃんの肩に手をまわした。「うん、そんな感じ、そんな感じ。ふたりはいつもいっしょに考えて、ふたりでひとつの気持ちだった。なにかしゃべるときは、同時にしゃべることもあるし、交代交代にしゃべることもあって、たとえば、『今度のあたたちのお誕生日にはね』とはなちゃんがいて、それからゆめちゃんが『新しいポケモンのゲームがほしいの』といって、また交代して『テレビで宣伝してたの』って言って、それから声を揃えて、『絶対買ってね』って。ふたりでひとつのことをしゃべっていた。でね、余所のひとに見られて怖がられたりすると、はなちゃんたちがかawaiiそうだから、ずっと家の中で育てられた。大きな家でお庭も広かった。幼稚園も小学校も行かなかった」。

「いいなあ」と、青花ちゃん。「はなちゃんちはお金持ちだったから、なんでもほしいものは買ってもらえた」と、ぼく。「ポケモンのゲームも買ってもらったの？」と、ポケモン好きの瑞希ちゃん。「うん、買ってあげるよって。でも、服は首を出すところがふたつないといけない、そんな服は売ってないから、お母さんが作ってくれた。かわいい服いっぱい作ってもらって、おしゃれを楽しんだ。アクセサリもいっぱいもっていた」。「いいなあ」と、ひかりもの好きの柚葉ちゃん。「はなちゃんたちは、それですっかりわがままな子になってしまった。はい、これでおしまい」。

ぼくの話のシャム双生児は、ふたりでひとつの心をもっている。鏡に向かって、仲の良い友達に相談するように、まったく自然な感じで、自己対話する女の子のことをぼくは思う。そうした自己対話は、女の子の特権である。女の子はすでに人形やぬいぐるみを通して、そういう自己対話の修練を積んできたから。それに女の子は日常生活において、おしゃれに気を配り、男の子よりも鏡と親しい間柄にあるから。また大人になると、常識が邪魔をして、鏡に向かって自然な感じで対話などできなくなるし、幼児には、わざわざ鏡に向かって、自分の気持ちや考えを明確にする必要は感じられないから。

女の子の心の深層には、心ひとつの双子の感覚があるのではないか。元々それがあるから友達関係において、相手と心を合わせることが容易になる。女の子は友達とふたりで心を合わせ、波長を合わせ、共振し、同じひとつの生の律動を刻む（ときにはボケとツツこみ）。そうして第三者に向き合うことがよくある。

女の子特有の双子の感覚において、その双子とは光と影ではない。善と悪ではない。対照的な性格のふたりではない。ユングのいう「影の人格」は、心の中に可能性として存在する反対の性格の自分であり、生きられていない半面ということであるが、双子はそうした影ではない。双子は影の人格以前にある。仲良しのふたりが、しだいに相手に自分とは相容れないものを見出し、反発を感じ、離れていくとき、ふたりは双子の感覚で結びついた位相から、お互いに自らの影を

見る位相へと変化したということになる。ユングによれば、影と向き合い、それを自分に取り入れていく努力をすることで、心の成長がもたらされるという。

双子はお互いに鏡像となり合う関係にある。一方が中身をもち、他方が空っぽなのではない。ひとつの内容を共有し合うふたりである。しかし、ともすればこうした双子の感覚は、相手に自らの影を見る位相へと進展するのではなく、中身を独り占めしたもうひとりの自分の幻想（それは鏡像段階における不安から生起する）を惹起してしまうことがあるのではないか。友達と心を合わせ、同じひとつの生の律動を刻んでいて、ふと我に返る。相手に合わせてばかり。相手に中身があって、自分は空っぽ。相手から中身を奪わないことには、自分自身になれないことに気づく。このとき中身を独り占めした相手に対して、激しい憎しみが生じることになる。思春期女子の不安定な人間関係の背後にある深層心理がこれである。前思春期の青花ちゃんと柚葉ちゃんの関係にも、その兆しのようなものが見えていた（ごっこ遊びで、やりたいことのすれ違いなど。「児童養護施設の子どもたちに語った『こわい話』(1)」本巻所収参照）。